

ひよくれんり 6

Cbizuru & Masamune

なかゆんきなこ

Kinako Nakayun



エタニティ文庫

目次

ひよくれんり 6

5

おいしいごはん

303

書き下ろし番外編

旦那様の意外な弱点

333

ひよくれんり6

プロローグ 〱 私のやる気スイッチ

学生の頃や、大学を卒業して書店で働いていた頃。気力が湧かなくて怠けたい気持ちになった時に、よく「誰か私のやる気スイッチ押しして」と言っていた。

やる気スイッチとは何かというところ、自分の背中にある、自分では押せないスイッチ。それを誰かに押ししてもらえば、みるみるやる気になって、勉強も仕事も頑張れる！ そんな想像をしていた。

だけど、本当はそんなスイッチは背中についていない。ただ「自分がやる気になれるのはスイッチが入っていないからだ」って、言い訳してただけだった。

それに「誰かが押ししてくれたらやる気になるよ」なんて、他力本願もいいところだよ。ね。

でも最近では、やる気スイッチは本当にあるなって思うんだ。

私の場合、これを押ししてくれるのは愛する家族——優しい旦那様と、可愛い息子。

二人が「美味い」って言うてくれるから料理が楽しい。それに、結婚前は面倒だな、

苦手だなんて思っていた掃除や洗濯だって、家族のためだと思おうと続けられる。

そりゃあ、ずーっとやる気に満ちているわけじゃないし、時には疲れて怠けなくなる時もある。けど、そんな時にはちよつと休んで家族のことを考えると、再びやる気スイッチが入っちゃう。

奥さんとして、お母さんとして、「よし！ また頑張るぞ！」って、思えるんだ。

そんな私こと柏木千鶴（旧姓は峰岸です）は、三十五歳の主婦です。結婚して以来ずっと専業主婦だったけど、最近知り合いが始めたカフェで働き始めました。なので、今は兼業主婦をやっています。

旦那様の柏木正宗さんとは、二十八歳の時にお見合いで知り合い、結婚しました。

正宗さんは私立高校で日本史を教えている、眼鏡の似合うイケメン教師。弓道部の顧問でもあります。性格は穏やかで優しくって、本当、私なんかにはもったいなさすぎる旦那様ですよ。

対する私は平々凡々。特筆することといったら、食い意地が張っていることと、あとは……BL作品が大好きな腐女子ってこと……かな。ええ、男と男の恋愛が大好きですよ！

結婚当初は隠していた趣味ですが、すぐに正宗さんにバレてしまい、現在は生温かく

見守られています……（それはそれで、とつても気まずいんだけど！）
身長は百五十二センチで、胸は……ささやか。せめてもう一つ大きいサイズになりたかった……！

母親譲りの少し色素の薄い髪は、いつも肩上くらいでキープ。伸ばそうと頑張っていた時期もあったけど、なんだかんだ今の髪型が一番気に入っています。

そんな私達の間に生まれた一人息子は優月。幼稚園の年中さんです。

名前の由来は、月がとて綺麗な夜に生まれたから。あと、この子を生む時にとでもお世話になった人の名前から一字をもらい、「優しい人になりますように」という願いを込めて、この名前を付けたのです。

見た目は私より正宗さんに似ていて、サラサラの黒髪で、将来が楽しみな顔をしています。親の鼻目もあるかもしれませんが、すごく可愛い子です。

性格は私の方に似ちゃって食いしんぼうですが、名前に込めた願いの通り、優しい子に育っています。自慢の息子です！

家族のために料理を作り、お掃除と洗濯をする。

家事をしながら優月を育てて、家庭菜園のお世話もします。

そんな日常が少しだけ変わったのは、今年の九月から。

私の知り合い——お隣の立花家の奥さん、志乃さんが開いたカフェで働かせてもらうようになったのだ。

ずっと専業主婦だった私が働きたいと言った時、正宗さんは反対した。

その理由は、優月はまだ小さいし、私が働き始めたら、家族で過ごす時間が減ってしまふんじゃないかということ。それに、家のことをしながら仕事をするのは大変だって。頭ごなしに反対されて、私もカッとなり、正宗さんと喧嘩をしました。

あの時のことを思うと、今でもちよつと胸が苦しくなる。自分の気持ちをわかってもらえないのが悲しくて、寂しかった。それから、感情的になって酷いことを言ったり、態度が悪かったりした自分が申し訳なくて……

ああでも、ちゃんと仲直りできました。二人で腹を割って話して、かえって喧嘩をする前よりもお互いのことをわかりあえた気がします。現在は正宗さんも私が働くことを応援し、協力してくれているのです。ありがたい。

家族だけじゃなくて、志乃さんや他のスタッフさん達にもすごくお世話になっている。優月の幼稚園のお迎えに間に合うようにと、仕事は二時で上がらせてもらっています。その上、シフトに入るのは平日だけで、土日は家族と過ごす時間をとれている。本当にありがたい。

お世話になっている志乃さんの役に立ちたいって思うし、仲良しのスタッフさん達と

一緒に働くのは楽しい。それに、お店に来てくれるお客さん達の笑顔を見ると、この仕事を選んでよかったなって思える。結婚前に働いていた、本屋さんでの接客経験が活かされたのも嬉しかった。

昔はしょっちゅう「働きたくないでござる〜」なんて、冗談めかして弱音を吐いていたのね。こんな日が来るとは、当時の自分は想像もしなかったんじゃないかな？

今まで家事だけをやっていたところに、外での仕事が増えたのは、確かに忙しく大変。

けれど、とつてもやりがいを感じるし、幸せだと思っ

私がおんな風に楽しく働けるのも、家族の応援と協力、それから職場の人達の理解があるおかげ。

だから私も頑張らなきゃ！ って思うし、頑張らなくちゃいけない。

これまで私のやる気スイッチを押してくれていたのは、家族だけだった。

そこに一緒に働く人達やお店のお客さん達が加わって、私はますますパワーアップしたような、そんな気持ちでいる。

もう誰かに「やる気スイッチを押して〜」なんて、泣き言を言うことはないだろう。だって私は今、こんなにもやる気満々なんだから！

優月と赤ちゃん言葉

十月のある日の朝。朝の準備を終えた優月が、私に声をかけてきました。

「おかあしゅーん。よういできまちた〜！」

「むむっ！」

幼稚園の制服を着て、帽子もばっちり被り、鞆かばんを斜めにかけて準備オツケイ！ な

優月。

先月誕生日を迎え、五歳になったこの子は最近、あることにハマっております。

それは……

「ようちえんいきまちゅー！」

赤ちゃん言葉、なのです。

以前はたどたどしいながらも普通に話していたのに、面白がってわざと赤ちゃん言葉を使うようになったのだ。

「こーら！ 赤ちゃん言葉はもう終わりでしょう？！」

「へへ〜。ごめんなちゃいっ」

「優月！」

「きゃは〜」

真剣な顔で怒ってみるものの、優月はその反応に、さらにきゃつきゃと笑う始末。親としては、ちゃんとした言葉で話してほしいんだけどなあ。

それに、私が怒っても効果がないって、ちよつとへこむわあ……うん。そこが一番しんどいのかも。

子育てって、なかなか思い通りにはいかなくて難しい。それが当たり前なのかもしれないけど。

そんなことを考えながら、私は優月を自転車チャイルドシートに乗せ、幼稚園まで送っていった。

いつもは正宗さんが通勤前に車で送ってくれるのですが、今日は朝から職員会議があつていつもより出勤時間が早く、代わりに私が送っていくことになったのです。

「あ、けんじくんだ！」

幼稚園に着くと、優月は仲の良いお友達姿を見つけ、自転車から降りて駆け寄ります。

うーん、微笑ましいねえ。

お友達の前では恥ずかしかがって、普通に喋るかと思いきや……

「おはようでちゅ〜！」

「おはようでちゅ〜！」

けんじくん、お前もか！

「はあ〜」

楽しそうに赤ちゃん言葉で話す二人を見て、思わずため息が零れる。

幼稚園ではけんじくんの他にも、赤ちゃん言葉を使っている子がちらほらといた。流しているのか幼稚園で！

他のママさん達は、「いずれ飽きるわよ〜」とおおらかに笑っているけれど……

(……私が気にしすぎなのかなあ……)

そんな引っかけりを覚えて、私は出勤した。

私の職場——町内の外れにある平屋の日本家を改装したカフェ『たちばな』は、先月オープンしたばかり。このオーナー兼店長は、我が家のお隣、立花家の奥さんの志乃さん。

一緒に働いているのは、志乃さんのお友達でパティシエの高野緑さん。緑さんは主にお菓子作りを担当しています。それからもう二人、フロアを担当するアルバイトスタッフさんがいる。

お店の定休日は毎週火曜日。火曜日が祝日だった場合、翌日がお休みになります。営

業時間は午前十時から夜の七時まで。私達スタッフは九時から五時までの早番と、十二時から閉店後の作業が終わる八時までの遅番に分かれ、シフトを調整しながらお店を回している。

元の日本家屋の風情を活かした和風のカフェ『たちばな』は、有機野菜を使った料理と、こだわりのブレンドコーヒーが自慢のお店です！野菜は志乃さんの知り合いの農家さんから仕入れている他に、お店の裏庭に作った畑で収穫されたものも使用。畑ではハーブも育てています。

最近はおコミでちよつとずつ評判が広がって、お客さんも増えてきた。

「おはようございまーす！」

「おはよう、千鶴ちゃん」

八時半くらいに店の裏口から入ると、すでに志乃さんがエプロンをつけて仕込み作業を始めていた。志乃さんはいつも早めに来ていて、裏庭の畑のお世話をしてから仕込み作業に入るんだよね。私も急いで着替えなくっちゃ！

今日のシフトでは、早番は志乃さんと私だけ。十二時からは、遅番の緑さんとアルバイトスタッフの安東香織ちゃんが入る。香織ちゃんはこのお店で一番若い、ぴっちぴちの二十二歳だ（と言ったら香織ちゃんに笑われたけど）。将来カフェを開くのが夢だそうで、ここで働くのはそのための修業なんだって。

お店にはスタッフのロッカーを置いた小さい更衣室があり、そこで制服に着替える。

『たちばな』の制服は、白いシャツに黒のパンツ。それからワインレッド地に白のストライプが入った胸当てエプロンを着けて、それとお揃いのハンチング帽を被る。オープン前にたくさんの候補の中から決めたこの制服は、私達のお気に入りだ。

「よしっ」

着替えを終えたら、まずはお掃除。

「掃除入りまーす」

「はい。よろしくね」

厨房の志乃さんに声をかけて、駐車場と店内の掃除をする。

駐車場やお店周りは箒で落ち葉や土埃を掃いて、ゴミが落ちていたら拾う。そして、プランターのお花や庭木に水を撒くのも朝の仕事だ。

お次は店内に入って、床をモップがけする。改装された店の床は、落ち着いた色合いのフローリング。それとは別に、和室をそのまま使った座敷席もある。

テーブル席は、遅番の人達が閉店後に椅子をテーブルの上上げているので、すぐにモップがけができる。

それが終わったら、今度は座敷席の畳を固く絞った雑巾で拭き掃除。フロアも座敷も、閉店後に掃除機をかけているから、朝はモップがけと拭き掃除だけでいいのだ。

あとは座敷席に座布団を敷いて、フロアのテーブルから椅子を下ろしてきちんと並べ、それぞれのテーブルを拭いて終わり！ そうそう、テーブル上の小物を整えたり、店内の観葉植物にお水をやりたりするのも忘れない。

最後にトイレをチェック。トイレ掃除は閉店後にしっかりとやりやってもらっているの、チェックといっても、埃が目につくようならそこだけちよちよいっと掃除するくらいかなあ。あ、天気の良い日はトイレの小窓を開けて換気しておきます。

掃除が終わったら、念入りに手を洗って厨房で仕込みのお手伝い。

ここで志乃さんから今日の目替わりメニューのことを聞いたり、簡単な打ち合わせも兼ねている。

時間のかかる仕込みは前日の夕方からしているので、開店前にするのはスープ作りと炊飯、それからサラダの準備かな。そのメニューによって変わるけど。

「今日は良い蓮根が入ったから、日替わりメニューのスープは蓮根のポタージュよ」

「わあ！ 美味しそうですね〜！」

志乃さんの言葉に、ついはいやいだ声を上げてしまった。

日替わりメニューは、その日手に入る食材を見て、志乃さんが考えている。

蓮根のポタージュかあ……。想像するだけで美味しそう……。とうとうりしていたら、志乃さんがクスツと笑い、「今日の賄いで食べていいわよ」と言ってくれた。

そうそう、ここでは昼と夜に賄いが出るのですよ。美味しいごはんが食べられると思うと、余計にはりきつちやうよね！

「ありがとうございます！」

今日の賄いごはんも、とっても楽しみだ！

開店時間の十時少し前。私は今日の日替わりメニューを書いたブラックボードを、店の入り口近くに出し、店内の有線放送のスイッチを入れた。するとスピーカーから、耳に心地良い音楽が流れ出す。

「オープンしまーす」

「はい」

時計の針が十時を指したら、厨房の志乃さんに声をかける。

ここからは、私がフロア担当で志乃さんは厨房担当。私は接客をし、志乃さんが作った料理をお客さんのもとに運ぶ。注文を取るのも料理を運ぶのも、始めたばかりの頃は緊張して戸惑ってばかりだったけど、最近はようやく板についてきた。

開店直後の時間帯は、ランチを食べに来る人や、静かにコーヒーを楽しむお客さんが多くて、まったりと時間が流れていく。時々ご近所さんが来店して、志乃さんも交えて世間話をしたり……。なんてこともある。

このお店は、ご近所さんの憩いの場になっているのだ。今までそういうお店、この辺になかったからね。

それがちょっと忙しくなるのはお昼時から。だけど、十二時になると緑さんと香織ちゃんも入るので、早番の私と志乃さんは、一時から三十分間の昼休憩をとる。更衣室の隣の和室が休憩室になっていて、ここの卓袱台で賄いを食べるのだ。

今はまだ、目が回るほど忙しい……！ というほどではないから、二人で休憩に入れる。でも、この先もっと忙しくなったら、休憩に入る人数や時間を調整しないとイケないかもしれないと、志乃さんは言っていた。

今日の賄いは、ランチプレートに出している和風ハンバーグと大根サラダ、それに蓮根のポタージュと五穀米だ。『たちばな』で出しているご飯は、白ご飯と五穀米の二種類で、お客さんが選べるようになってる。ちなみにどちらも、志乃さんのご実家で作っているお米を使っています。

「こんなに美味しいごはんをいただいた上にお給料ももらえるなんて、本当にありがたい。」「今日も美味しいですうう……！」

「あは、ありがとう。千鶴ちゃんって本当に美味しそうに食べてくれるから、作り甲斐があるわ」

お昼休憩中、賄いを食べつつ感動する私に、笑顔でそう仰る志乃さん。女神か。

美味しいごはんを堪能しながら、私達はおしゃべりも楽しむ。

「……それで、うちの子、相変わらず赤ちゃん言葉を使っているんですよ」

高校生の娘さんがいて、育児の大先輩でもある志乃さんに、優月の赤ちゃん言葉について話してみた。

怒っても全然直さないし、舐められてるのかなあと呟くと、志乃さんは「あんまり気にしすぎない方がいいわよ」と言った。

「優月ちゃんはまだ小さいんだから、可愛いもんじゃない」

「ですかねえ……。そういえば、志乃さんのところの千代ちゃんは優月のくらいの歳の時、どうでした？」

志乃さんの娘さん——千代ちゃんは時々、このお店の手伝いをしてくれる。

小学生の頃は、よく幼馴染の宗憲くんと、うちにおやつを食べに来たんだよね。

「うーん……。うちの子はそういうの、あんまりなかったわねえ……」

「そうだったんですか……」

「まあまあ。子どもの成長って、ほんとそれぞれ違うものよ。ついつい周りと比べたり、自分の思っていた通りにならなくて落ち込んだりするけれど、気にすることはないわ」「はい」

大先輩のお言葉は説得力があって、すっと胸に落ちてくる。

そうだよね、あんまり気にしすぎるのはよくないか。

それから数日後の土曜日の朝。

幼稚園と私の仕事はお休みだけど、正宗さんは弓道部の練習のため、出勤です。

なので、玄関先で二人で正宗さんをお見送りすることに。そこで私は、隣に立つ優月に言い聞かせる。

「いいい？　ちゃんと『いつてらっしゃい』って言うんだよ」

「はい」

「『いつてらっしゃい』はだめだからね？」

「はい！」

……返事だけはいいんだよ、この子。

優月は、相変わらず赤ちゃん言葉を使い続けている。その都度直すように言うんだけど、ちつとも聞きやしない。

そんな私達のやりとりを、玄関の三和士たたくしに立つ正宗さんは微笑ほほえましそうに見守っていた。

「はは。それじゃあ、いつてきます」

「はい。いつてらっしゃい」

「おとーしゃん、いつてらっしゃーいっ！」

「あつ、また！　こらー!!」

さつきは言わないって返事をしたのに、わざとふざけるんだから。

しかも言い逃げとばかり、逃げ足が超速い優月は、あつという間に家の奥に逃亡してしまった。くそ……

「ごめんなさい正宗さん。最近はずっとあんな調子で……」

私はしょんぼりと、正宗さんに頭を下げる。

親の……っていうか、私の言うことなんてちつとも聞いてくれない優月。

あんまり気にするのはよくないと思っていたのに、反抗期なのかなあと不安になっちゃう。今からこんな調子で、この子が本格的な反抗期を迎えた時、私はちゃんと向き合えるのだろうか……

「そんなに落ち込まないで下さい、千鶴さん。今は面白がっているようですが、きっとすぐに飽きますよ」

「そうかなあ……」

正宗さんの言葉にも、なかなか領うなずけないのです。

このままエスカレートして、先生や大人が話している途中でふざけたり、授業中に教室を飛び出したりしちゃう子に育ったらどうしよう……。『学級崩壊』や『問題児』の文字が頭を過より、私は不安になる。

たかが赤ちゃん言葉、されど赤ちゃん言葉……うむうう……

「俺からも話してみますから」

「うう……。すみません」

確かに、ここは父親である正宗さんにびしつと！ 言ってもらった方が効くのかも……

「では、いつてきま……あ、千鶴さん」

「はい？」

どうしたんだろう？ 何か言い忘れたことでも？

「いつてきま——」

途中まで言葉を紡いだ正宗さんの唇が、ちゅ……と私の唇に触れた。

「ふえ!?」

い、いいいいいい今！

ちゅー！ ちゅーされた、ちゅー!!

ししししかも！ これ、い、いつてきま……ちゅって！ いつてきまちゅ!!

なんだこれ！ 照れる！ 超照れる!!

ただ「いつてきます」のキスをされるより、照れるんですけどおおお!!

動揺する私を見て、正宗さんは「いたずら成功」みたいな笑みを浮かべていらっしや

るし！

「……続きは夜に」

きゃああああああ!!

私の唇を指の腹で撫でてから、正宗さんはそう囁いて、玄関を出ていった。

ふあ……、どうしよう、朝からすごいドキドキしちゃったよ……

結婚してだいぶ経つけれど、正宗さんはいまだに、こうしてすごい爆弾を落とす。

こういう時、私は一生正宗さんにドキドキさせられるんじゃないかなって思っつまう。

「おかあちゃん」

はっ！

気付けば優月が、柱の向こうから顔を半分出して、こちらを見ているではありませんか！

しかも、めっちゃにやにやしてるし！

ま、まさか、さっきの「ちゅー」を見られた？ 見られた!!

え、ええい落ち着け。落ち着け千鶴！ 親の威厳を取り戻せ!!

「どっ、どうしたの？」

私は努めて冷静な顔を作り、優月と向き合う。

「んふー」

なっ、なんなのよ、その満面の笑みは！

もしや、「ちゅーしてたねー、ちゅー！」って、囃はやしたてる気か？ もしくはご近所中に言い触らすつもりか……？ 「おとうさんとおかあさん、ちゅーしてたんだよ！」って！！

それはやめてええええええええええ！！ 恥ずかしくて外を歩けなくなるわ！！

「あのねえ……」

「……………」

笑顔のまま口を開く優月を見つめ、私は息を呑む。だけど――

「おなかちゅいたの」

「えっ」

なんだそれ……と脱力してしまう。

もしかして、さっきのちゅーは見られていなかったということかな。

っていうか私、考えが飛躍しすぎだよ！ 恥ずかしいiiiiiiiiii！！

「おやちゅ、おやちゅー」

親の気持ちなんて気にもせず、優月は恥ずかしさに悶絶もんぜつする私におやつを要求する。ついさっき、朝食を食べたじゃないのよ……

「だーめ。ごはん食べたばかりでしょう」

「ええー、ちよつとだけっ！ おねがいでちゅー」

優月は諦めずに、ちよつとだけでいいから〜とおねだりしてくる。

「……じゃあ、ちゃんと『おやつください』って言えたらいいよ」

赤ちゃん言葉じゃなくってね、と私は付け足す。すると優月はばあつと満面の笑みを浮かべて、「おやつください！」と言った。ちよろいな！

「よし！ じゃあ、ビスケット出してあげるね。ごはんのあとだから、少しだけだよ？」

「やったー！」

優月は私にぎゅーつと抱きついて、「ありがとうございます！」とお礼を言う。

もう、食べ物絡むと素直なんだもんなあ。あんなに言っても直らなかつたのに、おやつのためならあつさりなんだから。

我が子の現金さに、つい笑ってしまう。

誰に似たのかしら、この食い意地……って、確実に私ですね、すみません！

そんなこんなで、優月の面倒を見つつ家事に奮闘ふんとうしていたら、あつという間に夜になつた。

仕事がある日にはできない分を、休みの日に纏まとめてやっちゃうからね。

ちなみに、休日出勤だった正宗さんはお昼過ぎに帰ってきたので、そこからは正宗さんに優月を見てもらいました。正宗さんがいる間も、相変わらず赤ちゃん言葉ブームは続いていたみたい。お父さんが注意するとその場では直して、でもしばらく経つてからまた使う……という感じでした。特に私に対してよく使うのは、やっぱり私が舐められるからだろうか……

そして、夜にはいつも通り正宗さんが優月と一緒にお風呂に入って、優月は先に就寝。あとからお風呂に入った私は、裸にバスタオルを巻いた恰好で自分の部屋に向かう。

我が家の二階には部屋が三室ある。一部屋は私の自室で、真ん中の一部屋は正宗さんの書斎、残る一番大きな部屋を家族の寝室として使っているのだ。

寝室には優月が寝ていますからね。その……正宗さんとセ、セックスするのは、もっぱら私の部屋で……なのです。

襦をそっと開けると、正宗さんはいつもと同じく浴衣姿で、長座布団の上に座って文庫本を読んでいた。この間、一緒に本屋さんに行った時に買っていた新刊だ。私も気になって、読み終わったら貸してもらおう約束をしている。

「千鶴さん」

正宗さんは私に気付くと、微笑を浮かべておいでおいでと手招きをし、自分の膝を叩く。

ここに座りなさい、ってことなんだろう。

十月に入って夜は冷えるようになったので、お風呂上がりとはいえちよつと肌寒い。なので、私は温もりを求め、正宗さんの膝の上に向き合う姿勢で座った。

そうすると、正宗さんがぎゅっと抱き締めてくれる。えへへ、あったかい。すぐに脱ぐからって、裸にバスタオル一枚なのもそろそろ考えないとなあ……

そんなことを思っていたら、正宗さんが私の髪を撫でながら、「まだ濡れていますね」と言った。

「あ……」

えっと、お風呂上がりに洗面所でドライヤーを使ってきたんだけど、その……は、早く正宗さんの所に行きたいなー、なんてね。気が急いで、ちゃちゃつと済ませてくださいから……だから半乾きなのです……！

だって早くぎゅってしてもらいたくて！ とはとも言えず、言葉に詰まる。だけど正宗さんは全とお見通しのように、苦笑しつつ口を開いた。

「急いで来てくれたんですね。嬉しいですが、千鶴さんが風邪を引いたら困ります」

「あ……」

ちゅっ、と私の頭に正宗さんのキスが落ちる。

ふふ……っ、なんだかこそばゆい。

お風呂上がりだから、私の身体は今シャンプーとボディソープの匂いにするだろう。それは正宗さんも同じで、浴衣越しに香る匂いに、うっとり目を細めてしまう。

「……今日は随分甘えたさんですね」

すりすりと正宗さんの胸に擦り寄っていたら、そんなことを言われた。

「んー、ちよつと疲れているのかもしれない」

カフェのお仕事には、最近ようやく慣れてきた。だけど、七年振りに働き始めた身体は、まだ家事と仕事の両立についていけない気がする。

だから、こうしてリラックスするうちに、正宗さんに思いつきり甘えたい気分になってしまった。

心が充電を求めているのですよ。ぎぶみー正宗さん！ です。

私の頭を撫でつつ、正宗さんがふと呟く。

「……もしかしたら優月も、あの喋り方で千鶴さんに甘えているのかもしれない」

「優月が……？」

そうなのかな……？

「たぶん。ああやって赤ちゃんみたいに甘えて、千鶴さんの気を引きたいだけなのかもしれない」

「そっかあ……」

優月は、まだ五歳になったばかりだもんね。

そりゃあ、お母さんに甘えたくなかったりもするか……

なのに私ったら、ちつとも言うことを聞かない！ って怒るだけで……。うん、ちよつと反省です。

「明日は思いつきり、優月を甘やかしてあげようと思います」

赤ちゃん言葉にも目を瞑ろう！ 思いつきりぎゅーっしてあげよう！

私は、正宗さんにぎゅーされながら、そう心に決めた。

「俺もそうします。……でも今は、千鶴さんを甘やかしたいです。いいですか？」

「は、はい……」

も、もちろんでございます……！

「正宗さん。朝の『いつてきま……ちゅっ』の続きを、してほしいです」

小声で囁いたら、正宗さんは笑みを深めて頷いた。

そうして、私の唇にちゅつと、啄ばむようなキスをしてくれる。

「……ふふっ」

わざと音を立ててされたキスはくすぐったくて、ついクスクスと笑ってしまう。

なんだか正宗さんにじゃれつかれているみたいに思えて、心もこそばゆくなるのだ。でも、嬉しい。

そのキスは、私の額、頬、首筋、胸元に順番に落ちて……

「あ……っ」

ふいに、正宗さんの手が、私の身体に巻かれているバスタオルにかかった。はらりとタオルをとられ、ゆっくりと長座布団の上に押し倒される。

「んんっ……」

正宗さんは私の上に覆い被さると、キスをしながら片手で胸を掬い上げるように揉みしだき始めた。

「はあ……っ、ん……」

最初は唇を触れ合わせるだけだった口付けは、舌を絡め合う深いものに、徐々に変わっていく。

角度を変える度に熱い息が零れて、溢れそうになる唾液は彼の舌が絡めとった。お互いのそれが混じり合ったものを、時折こくと嚙下する。

「……んっ、く……」

私は、湯冷めしそうになっていた肌が、内側から熱くなっていくのを感じていた。

やわやわと胸全体を揉むだけだった正宗さんの指先は、頂をくりくりと弄り始める。そうされると、身体がびくくと震えて、奥がきゅんとする……。私は身を振りながら、もじもじと太ももを擦り合わせた。

「……っあ……」

正宗さんのもう片手が、私の太ももやお腹を撫で始める。

「やあ……っ」

ただ触れられているだけなのにどうしようもなく感じてしまっって、私は熱に潤む瞳で正宗さんを見上げた。

「……………」

正宗さんは、甘く蕩けるような赤面もののお顔で、私を見つめている。

何も言わなくても、視線で「愛おしい」と囁かれているみたいで……。だ、だめだ、キyun死してしまいそうです。

「……もっ」と

正宗さんの麗しいお顔を直視できず、私はきゅっと目を瞑ってさらにキスをねだる。キスに夢中になって蕩けているうちに、この恥ずかしさも何もかも、快樂と混ざり合っって溶けてしまえばいい。

「……はい」

優しく甘い旦那様は、そんな私の願いに応えてくれる。

唇が腫れてしまうんじゃないかと思うくらい、たくさんのキス。その間ゆっくり高められていた私の身体は、すっかり解されていく。

「や……あつ、ああつ……」

それまでの優しい愛撫から一転。正宗さんは濡れそぼった私の秘所に指を挿し入れると、激しくナカの滴を掻き回すように指を動かし始めた。くちゅつ、ぐちゅつと、いやらしい音が耳を打つ。

そうやって私を攻める正宗さんの息も、荒くなっていく。興奮してくれているんだと思つと、余計に気が昂ぶった。

「……あつ、だめ……つ、も……イツちゃ……んんっ！」

私は正宗さんの首に両手を回し、しがみつくように抱きついて、最初の絶頂を迎えた。はあ、はあと乱れた息が零れる。

身体が熱い。汗が出ている……

でも、足りない。まだまだ、甘え足りないのだ。

私のそりと身を起こして、下着越しに正宗さん自身に触れた。彼は私の意図を察してか、長座布団の上に胡坐をかいて座る。

はあ……。相変わらず、乱れた浴衣がため息が出るほど色っぽい。垂涎モノですよ。身体に燻る熱に浮かされている私は、正宗さんの股間にゆつくりと顔を近付けた。

「んっ……」

鼻先で撫でるようにすりすりする。硬く隆起しているソレが、とつても愛おしく感じ

られた。

ちよつと躊躇つてから、私は下着越しにべろりと舌を這わせる。頭上で正宗さんがぎよつとする気配がしたけど、私はそのままべろべろと舌を動かした。

私の唾液で湿った布越しに感じる、彼の匂い……つて、変態くさいな私！

「……千鶴さん……っ」

「んー」

もうそろそろ、いいかな。

正宗さんの下着をずらすと、硬く聳えるソレが顔を覗かせる。

わーお。何度見ても凶悪なお顔です。

でも、これが可愛く思えるんだから、不思議だよなあ……

やっぱり愛情故、ですかね。

「んんっ」

両手で正宗さん自身を固定しながら、べろべろ、ちろちろと舌で愛撫する。

正宗さんはいつの間にか私の頭を押さえて、唇から艶めかしい吐息を漏らしていた。

そうされると、なんだか無理やり舐めさせられているような気になって、ちよつと興奮……してしまうのは、私にMツ気があるからなんでしょうか。

でもさ、それとは別に、正宗さんが感じてくれているんだと思つと、もつとしたくな

るんだよね。

裏筋をつつうと舌先でなぞり、時折先端をばくつと咥え、舌の腹でねつとりと舐め上げる。

主にBL漫画の濡れ場から知識を得て、正宗さんとの睦み合いで実践しているテクニクだ。

自分がちゃんと上手にやれているのか、いまいち自信はないけれど、とりあえず感じてくれている様子なので、よしとしよう。

「千鶴さん……っ、もう……」

「……んむっ」

もうちよつと触れていたかったものの、正宗さんに促され、素直に顔を上げる。

正宗さんは困ったような顔で私の唇を拭ってから、テーブルの上に置いていたコンドームの封を切り、慣れた手付きで自身に被せる。

それを待つて、私は胡坐をかいたままの正宗さんと向かい合う体勢でゆっくり腰を落とした。

「はあ……んっ」

ずぶずぶと、正宗さんの雄が私に突き刺さっていく。この瞬間は、いつも少しだけ苦しい。

けれど同じくらい、嬉しくてたまらなかった。

奥まで繋がりが合い、はああつと深く息を吐いた私は、正宗さんにぎゅうつとしがみつく。身動ぐだけでも、内側が刺激されて快感が走る。

「……今日は、随分積極的なんですね」

自分から啞えて、跨るなんて……と、私の痴態を正宗さんが微かに笑う。

だってなんだか、そういう気分だったんだもん。

正宗さんが欲しくてたまらない。そんな夜もある。

「……こ………この、いや………ですか………っ？」

正宗さんをナカに沈めたまま、私は震える声で彼に問いかけた。

「そんなわけないじゃないですか」

大歓迎ですよ……と、耳元に熱く囁かれ、同時に下から激しく突き上げられる。

「ひゃあ……っ」

やはい！ 声出る！ 優月が起きちやう……

私はとっさに唇を噛み、声を上げないよう頑張った。

「んっ、んんー！」

緩急をつけて腰を動かされ、お互いの肌がばちばちと触れ合う音が響く。

正宗さんの肩にしがみついていた私は、そのうち彼に顎をとられ、キスをしながら繋

がり合うことになった。

お、おまけに正宗さんってば、さりげなく私のお尻も揉み始めるし……！
お尻のお肉を揉みしだかれて、下から容赦なく突き上げられる。

「……っ、あ……っ……ん、んー！」

私も、さらなる快感を求めるように自分でも腰を揺らしてしまっ。

硬くて熱い肉棒に内側を擦られるのがたまらない。気持ち良くて、もっと、もっと……ってなつて、止まらなかつた。

「んっ、んっ、んんっ……！」

腰を動かす私を、正宗さんは嬉しそうに見つめている。

その瞳の熱に、またぞくぞくっつと背筋が震えて……

「……っ、……ん、んっつ!!」

私は正宗さんの上で盛大に背中を反らし、絶頂を迎えた。

* * *

「はあっつ、はあ……っ」

俺の上で絶頂を迎えた千鶴さんは、荒い息を吐きながら力なく倒れ込む。

抱き締めた柔らかい身体。しつとりと汗に濡れた肌と肌が張り付くような感覚が、とても心地良い。

こうして繋がったまま、ずっとくっついていたくなる。だが、避妊のことを考えるとそうもいかない。

名残を惜しみつつ、俺はそっと彼女の身体を長座布団の上に倒し、自身を引き抜く。

そして避妊具を始末し、新しいものを被せた。

「……も、いっかい……？」

熱に浮かされたような目で俺の行動を見つめていた千鶴さんが、そう尋ねる。

やや掠れた声と舌足らずな物言いが可愛らしくて、俺は笑みを深めて「ええ」と頷いた。

「明日は休みですからね。もう少しお付き合いいただけますか？ 奥さん」

「う……、はい……」

千鶴さんは恥ずかしそうに小さく頷き、長座布団に顔を埋めた。

さつきまであんなに積極的だったのに、今は羞恥の方が勝るらしい。

そんな初心なところと、それでもなお俺の欲情を受け入れようとしてくれているところが、どうしようもなく愛おしい。

寝そべっている彼女の頬をそっと撫でる。頬に張り付いた髪を耳にかければ、千鶴さ

んは俺の手をとって、掌てのひらにちゅ……っと口付けをした。

そして猫が飼い主に甘えるように、すりすりとは頬ずりをする。

「千鶴さん……」

甘えたな彼女がたまらなく可愛い。

俺は猫の毛並みを愛めでるように、彼女の頭を撫なでた。

千鶴さんは満足そうに、されるがまま、俺に身を寄せてくる。

俺はそんな彼女の隣に寝そべって、そっとその身体に手を這はわせた。すると、千鶴さんも同じように俺の身体を撫でる。

千鶴さんはどこもかしこも柔らかくて——と言ったら、泣いて怒られる気がするので言えないが——とても触り心地が良い。

今の俺達の手付きは、愛撫……というよりは、ただの触れ合いに近い。

けれど、こんなスローペースな触れ合いが、ゆっくりとお互いの心を満たしてくれるような感覚を覚えた。

時折、俺は掠かすめるみたいに千鶴さんの足の付け根に触れる。そこを撫でられると、彼女の身体はわかりやすくびくっと震え、反応を示す。

それに気を良くしながら、またなんでもない顔で他の場所を撫でる。

すると、千鶴さんも負けじと俺の身体に触れてきた。俺の胸にちゅうっと吸いついた

かと思うと、手を俺の股間に伸ばし、肉棒を優しく握り込む。思わず吐息を漏もらした俺に、千鶴さんは満足げに微笑した。

お互いに一度——千鶴さんは二度だが——絶頂を迎えているからこそ余裕もあったのだろう。じゃれあうように、ただ触れたり、キスをしたり、抱き締めたり、時折いたずらをしかけたり。そんな時間を、俺達はゆっくりと楽しんだ。

やがて触れ合いは、お互いの熱をもっと高めるものに変わった。俺は彼女の薄い茂しげみを撫で、その奥に隠された秘裂ひひに触れる。

そして千鶴さんの手も、俺自身へと伸びた。

ただ撫でられているだけなのに、彼女の手だとこんなにも気持ち良い。

千鶴さんも同様に思ってくれていたらしいと、そう思った。

「正宗さん……」

そろそろ……と、千鶴さんがねだるような視線を俺に向ける。

そうですね。俺もそろそろ、千鶴さんと繋がつなりたいです。

心の中で答えつつ、彼女の身体を長座布団の上に仰向けに寝かせる。

俺はその上に覆おひ被おさり、自身に手を添え、ゆっくり彼女のナカに挿さし入った。

「んあっ……」

「……っ……」

一度繋がりが合った蜜壺はまだ柔らかく解れていて、ねっとりとなんか俺を迎え入れてくれた。相変わらず温かくてやや狭いソコは、ぴったりと俺の形になっている。

俺のことが知らない身体。俺だけの……
それが、愛おしくてしよがなかつた。

その感覚を堪能したくて、ゆっくり、ゆっくり最奥まで自身を沈める。
そうして深い息を吐いてから、少しずつ腰を動かし始めた。

「んっ、んんっ……」

腰を引いて、軽く浅い所を突くように動く。

時折、深い所を激しく穿つために腰を振った。

「……っ、ふあ……ん、あ……っ」

大きな声を上げまいと堪える、彼女の鼻にかかったような吐息が、いつそう興奮を募らせる。

腰を振りながら、千鶴さんの胸や腹に触れた。さんざん触り尽くしたのに、足りない。白くて、熱くて、柔らかい身体に、もっと触れたい。

彼女の身体から立ち昇る、シャンプーの匂いが混じり合った甘い香りにも、情欲が掻き立てられた。

「はっ、はあっ……はあっ……」

だんだんと、息が荒くなってくる。

最初はあつたはずの余裕が、今は跡形もない。

自分でも気付かぬうちに愛撫の手が止まり、獣みたいに激しく腰を振っていた。

千鶴さんはそんな俺を宥めるためか、俺の身体を抱き寄せ、頭や背を撫でる。

こうなってくると、彼女を甘やかすというよりは、俺が甘やかされているような状態だ。

「っ、あ……っん……っ、まさむねさんっ、まさむねさ……っ」

好き勝手に振る舞う俺の欲望を、千鶴さんはそのまま受け止めてくれた。

「……っ、く……っ」

互いの身体を強く抱き締め合って、共に絶頂を迎える。

「はあ……っ」

すごく、気持ち良かった。

身体だけでなく、心も満たされる。

そんな充足感を、結婚してからずっと、千鶴さんは俺に与えてくれている。

俺の下で快樂の余韻に蕩けている千鶴さんが可愛くて、愛おしくてたまらない。

真つ白い肌がほんのりと赤く染まって、ああ、なんて綺麗なんだろう。

一度は鎮まった情欲が、またむくりと鎌首をもたげる。

「……………千鶴さん、もう一回、いいですか？」
 繋がり合ったまま三戦目を願えば、千鶴さんはぎょっとした顔をして、それからしばらく考えるそぶりを見せた。そして、「そ、それで最後ですからね」と言って、受け入れてくれた。

彼女の身体に無理を強いているとわかっているのに、つい甘えてしまう。
 これじゃあ俺も、優月のことは言えないかもしれないな。

* * *

土曜の夜に正宗さんとお話してから（お話だけでは済みませんでした……。ええ、えらい目に遭いましたよ……）、優月の赤ちゃん言葉には目を瞑って甘やかしてやろう！と心に決めていたのですが……

なんと翌日、赤ちゃん言葉ブームは呆気なく終わりを迎えたのです。

というのも、その日の午後、久しぶりに幸村先生と隼さんが遊びに来て下さいましたね。

あ、幸村先生こと幸村真さんは、正宗さんの学生時代のご友人で、現在は同じ私立高校の養護教諭。だから、私は幸村先生と呼ばせてもらっています。

そして水無月隼さんは、そんな幸村先生の同性の恋人！ 和服姿がよく似合う中性的な美青年で、日本画家として活躍されています。

お二人は一緒に暮らしていて、時折食事会をしたり飲み会をしたり、一緒に旅行に行ったりと、家族ぐるみの付き合いをさせてもらっている。

そうそう、実は優月の名前は、隼さんから『月』の字をいただいたのですよ。この子を生む時、すごく力になって下さった恩人だから。

そんな縁もあって、幸村先生も隼さんも、優月のことをとても可愛がって下さっている。

優月は特に隼さんにべったり懐いていて、正宗さんが「いつか水無月と結婚すると言い出すんじゃない……」なんて、心配するほどだ。

「ろうちゃんだー！ ろうちゃん、ろうちゃん！ いっちょにあそびまちょー」
 玄関でお二人を迎えた優月は大喜び！

こころばらく、隼さんは個展の準備があつてうちに遊びに来られなかったから、久しぶりの再会が嬉しくてたまらないのだろう。

いつも以上に甘えた声を出して、優月は隼さんに駆け寄った……んだけど。

「なんだその言葉。恥ずかしいな」

隼さんは優月の赤ちゃん言葉に眉を擡め、ズバツと一言。

「!？」

「おおう……。優月は目に見えてショックを受けている。漫画でよくある、「ガーン！」って効果音がびつたりの様子です。

まあねえ……。自分では面白いと思っていたものを、大好きな隼さんに「恥ずかしい」ときっぱり言われたら、そりゃショックで固まっちゃうよねえ。

さて、どうフォローしたものと、私は優月を見る。

それは一緒にいた正宗さんや幸村先生も同様らしい。二人とも、優月になんと声をかけるべきか、悩んでいるようだった。

「……………ろうちゃん」

しかし、そんな大人達の心配をよそに、優月は沈黙の後キリッとした顔で隼さんを見上げると、改めて口を開く。

「いっしょに、あそびましょう」

赤ちゃん言葉？ 何それ知らないけど？ と言わんばかりの顔で、優月は隼さんに手を伸ばしました。

（ぶはっ！）

ちよつと、この子だけ隼さんのこと大好きなのよ！ と、それを見ていた私はもう大爆笑です。だって、なんかいつもより気取ってる！ 気取ってますよ、この子！

見れば、正宗さんと幸村先生も肩を震わせて笑いを堪えている。

隼さんというのと、きちんと言い直した優月に「よし」と満足げに頷いて、優月を抱っこして家の中へ入っていった。

「しばらく会わない間に、少し重くなったな」

「え〜？ おもくないよ〜。ろうちゃんのいじわる〜」

きやつきゃつと嬉しそうに笑う優月の声が聞こえてくる。

（お前は女子か！ 彼氏に体重のことを言われた時の女子か！）

相変わらず、隼さんと優月はらぶらぶであまあまです。

そしてこれ以降、優月の赤ちゃん言葉はびたつと治まったのでした。

みんなでハロウィン

十月三十一日、ハロウィンの夜。

私達親子三人は、とある建物にやってきました。ここは、幸村先生と隼さんの愛の巣……もとい、お二人が暮らすマンションです。

「たのしみだねー、おかあさん」

車から降りた優月は、期待を胸にわくわくしております。その手に持っているのは、隼さんからもらったハロウィンパーティーの招待状。

今月初め、優月は隼さんと幸村先生からこの招待状をもらったのです。しかも隼さん手作り！ これを受け取った時の優月は大喜びで、リアルに小踊りしてましたよ。それは浮かれたステップでございました。

おまけに今日まで、招待状をお仏壇に飾って毎日拝む始末……。ちなみに、我が家ではいただきものをお仏壇に上げる習慣があるので、その影響かな？ と思っております。あの子の中では「良い物をもたらしたらお仏壇に！」というルールが出来上がっているようなのです。

招待状には、親子三人でいらして下さいと書かれていました。そして、ハロウィンパーティーということで、仮装して来るようにとの指示も。

仮装の希望を聞いた時、優月が指差したのは、とある絵本のクマさんとウサギさん。その絵本も隼さんから贈られたもので、優月が今一番気に入っている絵本です。

森でクマさんとウサギさんが仲良く暮らしている……っていう、ほのぼのストーリー。(あんまり『ハロウィン』って感じはしないけど……)

せっかくだし優月の希望を叶えましょうということで、正宗さんと優月はクマさん、私はウサギさんのコスプレ……。もとい、仮装をしてやってきました。

ちなみに優月は、クマさんの着ぐるみ風衣装を纏っています。子ども用の仮装衣装を扱っている通販サイトで見つけたのですよ！ 茶色のフリース素材でできていて、ハロウィン後もバジャマとして使えるのが購入の決め手でした。

我が子ながら……めちゃくちゃ可愛いです！ 出かける前に、家で何枚も写真に収めちゃいました。ふふふ、正宗さんも自分のスマートフォンで撮影してたんですよ。ちらっと見たら、待ち受けに設定してました。

そんな正宗さんの衣装は、普通の私服にクマ耳のついたカチューシャです。

優月が着ているようなクマさん着ぐるみの大人用もあったのですが、正宗さんには可愛すぎるといふかなんというかで……。いやそれはそれで私的には萌えるし、見たかつ

ただだけど！ 正宗さんが「これはちよつと……」ってね。そりゃそうだ。

他の衣装だと、あとはガチな着ぐるみくらいしかなかったのですよ……

なので、不器用ながら私が正宗さんのクマ耳を手作りいたしました！ 市販のチューシーヤに、作ったクマ耳をくつつけるだけの簡単な出来ですが。

それでも優月はお父さんのクマさん姿に満足らしく、にっこにこしながら正宗さんのクマ耳を見えています。おそろいなのが嬉しいようです。

そして、私も仮装をしているものの……。女性用のウサギさんの仮装衣装ってね、やたらセクシーなのが多かったですよ！ バニーガールのなやつね。正宗さんには、それでもいいんじゃないかと言われましたが……は、恥ずかしいです。第一、さすがに人様のお宅にお邪魔するのにそんな恰好はまずかろうと思ひ、ウサ耳カチューシーだけ通販しました。

服は白のウサ耳に合わせた白いワンピースを着て、白いフェイクファーのマフラーを巻いています。

ちなみに私の仮装に、優月は何故か上から目線で「……うん、うん。かわいいんじゃない？」と言っていました。なんか複雑！

そんなこんなで用意してきたウサ耳を、お二人の部屋の玄関前で装着しました。

え？ ウサ耳をつけてこなかったのかって？ だって、クマ耳はあまり目立たないけ

れど、ウサ耳は長くて目立つし、見られたらちよつと恥ずかしいじゃないですか！

というわけで、私の仮装は今完成なのです。

「ぼくがつ、ぼくがならすー！」

優月がびよんびよん跳ねながら、自分がインターフォンを鳴らす！ と主張しております。が、優月の身長では届かないので、苦笑した正宗さんに抱っこしてもらいました。

「えいつ」

ピンポンという音が響く。

すると、さして間を置かずに、がちやりと扉が開いて……

「よお、よく来た——」

「ひよええええええええ!!」

中から臙さんが顔を出した瞬間、優月の悲鳴が響き渡りました。

えっと、何故かと言いますと、出迎えてくれた臙さんがですね、なんとも凶悪な白いマスクを被り、チューンソーを持っていたからです。

金曜日で有名なジェイソンさんですね。私と正宗さんは声でわかったので、驚かなかつたものの……

ぶっちゃけ、かなり怖いです臙さん！ どうしてそれをチョイスしたのですか!!

「悪い悪い」

「ろうちゃん！」

涙目だった優月は、隼さんがマスクをとって綺麗な顔を露わにすると、すぐに笑顔になりました。切り替え早いな。

「それすごいね！ びっくりしたー」

「だろ？ びっくりさせようと思って。怖かったか？」

「ちょっとだけ……。でも、かっこいい」

おいおい優月。頬を赤らめてもじもじしないの。正宗さんが複雑そうな顔で見てるでしょ！

「そっか。お前は可愛いな。クマさんか」

「っ！ ろうちゃん」

感極まったような顔で、ぎゅうつと隼さんに抱きつく優月。

この二人は今日もらぶらぶです。

そんなお出迎えのあと、私達はリビングに通される。

「いらっしやーい」

出迎えて下さった幸村先生は、髪をポニーテールに結び、忍者服を纏っていた。しかも両手の人差し指を立て、祈るように組んで印を結び「ニンニン」とか言ってます。

「まこちゃん！ ニンジャだー！」

某忍者アニメが好きな優月は、喜び勇んで幸村先生に抱きつきました。ちなみに私もこのアニメ、大好きです！

「まこちゃん、まこちゃん、ぶんしんのじゅつ、みせて！」

「あははー。まこちゃんはまだ修行中だから、無理なんだー」

「ヒラ忍者だからな」

くっくと意地悪な笑みを浮かべるのは隼さん。ちなみに、チェンソーをやたら軽々持っているなあとと思ったら、本物そっくりに作った偽物なのだそうです。

「あははつ。ゆうちゃんのクマさんとっても可愛いね！ 正宗とちーちゃんも、クマさんとウサギさんなんだ。森の動物親子だね」

着ぐるみ風衣装を見て笑う幸村先生に、優月は胸を張る。

「ぼくがえらんだんだよっ」

得意気な優月の頭をぼんぼんと撫でながら、幸村先生は「センスいいな」と笑ってくれました。

「ほわああああ」

リビングに通されてから十分後。

お洒落なガラステーブルの上に所狭しと並べられたハロウィンディナーに、優月は目